

(別紙1)

論文の要旨

題目 エヴゲーニー・バラトゥインスキー
—対話の詩学
氏名 三好 俊介

エヴゲーニー・バラトゥインスキー(1800-1844)という詩人はわが国ではまったく無名だが、独自の思弁的詩風で知られ、ロシア詩史のうえで決して無視できない位置を占めている。ロシア詩にはチュッチェフ、ザボロツキー、ホダセヴィチ、プロツキー等と続く哲学的抒情詩の系譜が存在するが、ある意味でバラトゥインスキーはその嚆矢ともいえ、特にノーベル賞詩人プロツキーが彼の作品に出会ったことがきっかけで詩に開眼したことはよく知られている。

だが、バラトゥインスキーが現代の私たちにとって何らかの意味をもつと思われる最大の理由は、そうした文学史的事実とは別にある。この詩人の際立った特徴は、詩人とは何者かということを中心に考え、詩人と読者の望ましい関係について常に思索し、そしてそうした思索を詩につづったことにある。19世紀前半のいわゆる「ロシア詩の黄金時代」の詩人の中でも、この詩人ほど多くの「詩についての詩」を書いたものは他にいないのである。

本論文は、彼のこうした特質を「対話」というキーワードによって浮き彫りにしようとする。彼は早くから自らとは異質な存在（それは人に限らず、自然や時間でもある）と対話しようとする志向を示しているが、中期以降の諸作品では関心を「詩人—読者」間の対話へと絞り込んでいる（これは1830年代以降のロシアにおける詩の衰退を反映している）。

彼は「思考」という概念をきわめてユニークなイメージで理解しており、芸術家に不可欠な“創造的思考”と、思考の主体である「人」の意思をはなれて勝手に増殖してゆく恐るべき「生きた思考」とに分けて考えていた（このことを指摘するのは拙論が初めてである）。人々はこの「生きた思考」に呑み込まれないよう、日ごろから「思考すること」への免疫を備えておくべきだと彼は考え、自らの詩によってそれを援助しようとした。彼の詩は難解かつ、詩としてはかなり風変わりな“論理的”文体で構成され、読者が作品を漫然と受容するのではなく、自ら思考し、主体的にテキストにかかわるように促している。

この論文は七章構成をとり、基本的には詩人の作品を制作年代順に読んでゆく形をとる（一・二章は初期作品における対話的志向を概観し、三・四章は「思考」の問題を中心に「詩人—読者」間の対話的関係について、残りの三章では晩年の詩集『たそがれ』を精読し、そこで詩人という存在そのもののイメージが再構築されていることを確認する。また、論文全体の方針として、この詩人を単独の文学的現象とはとらえずに、他の作家とのかかわり（伝記的かかわりというよりは、むしろ作品テキストレベルでの）について考察することを重視した。彼の作品とプーシキンやプロツキーの作品との独特な関係をめぐりいくつかの考察は、拙論によって初めて提出されるものである。